

お会いした時に二人で話したと思いますが、平穩死をすんなり受け入れられるかどうかはご本人の年齢にも関係があるように思います。

父は今年 13 回忌になります。亡くなったときは 75 歳でした。父の終末医療をどうするかと主治医に尋ねられた時、母はその意味さえ分からなかった様子でした。当時母は「どんな姿でも生きてほしい」と訴え、気管切開も胃ろうもして 2 年間意識が戻らないままベッドで過ごして亡くなりました。脳内出血で倒れた私の夫が一度は意識不

明に陥りながら、リハビリで職場復帰を果たしたのを見ていたので、母はわずかの可能性を信じたかったと思います。意識は戻りませんでした、車椅子にのせて散歩したり一生懸命でした。それを見た看護師から「虐待だ」と言われたこともありましたが、でも、最期は胃潰瘍から吐血して、血液が気管切開のところから入ったようで、吐血からまもなく誤嚥性肺炎で亡くなりました。この経験はとてもつらいもので、今回母の終末医療を考えるベースになっています。でも、さかのぼって父の時に平穏死を選べたかというとうどうだったろうと思います。70代は若いですが、まだ何らかの可能性があるのであるように思っても仕方ないと思うのです。

母は89歳でした。私の周囲には100歳を越えてもお元気な方が多くて、主治医から「お母さまはそろそろ老衰の域ですよ」といわれたのですが、なかなか信じられませんでした。ドクターは「老衰というのは年齢ではないですよ」と言われました。お会いした時お話ししたと思いますが母は、食は細くなっていたものの口も頭もしっかりしていたので、まだまだ大丈夫なつもりでした。ですから最初ドクターから終末医療についてお話があった時はなかなかピンとこなかったのが正直なところでした。ただ、父の事があったので胃ろうや気管切開は辞退しました。でもドクターはそんな事ではなくもっと本質的に自然な看取りを選択するかどうかとつっこんで尋ねてこられたのです。その時にあなたのご著書が頭に浮かびました。あなたのおかげでドクターのおっしゃる意味がはっきりわかったのです。

父が亡くなって10年余りを経て終末医療に対する世の風潮もずいぶん変わり、なるべく過剰な医療を施さない方向に傾いているのは確実だと思います。

では、人々が迷うのはどこかという、自然な看取りを選択することとは「ひょっとして何もしない選択は死を早める選択になるのではないか」とか「飢餓状態で死なせるのは可哀そうだ」という罪の意識のような後ろめたさがあるのではないのでしょうか。あなたのご著書でもお父様が「命の事が心配だ」とおっしゃっていましたね。

でも、あなたのご著書でお父様は決して苦しんだりされず、「仲良し時間」も経験されて静かに逝かれましたね。病院のスタッフの皆さんから敬意に満ちた見送りを受け、周囲のご家族にも看取りの達成感があったように感じられました。この事例は、父のような苦しみを決して繰り返したくないけれど、上に書いたような罪悪感や不安もあった私にとって希望の光だったのです。

母の主治医の説明もとても行き届いていました。自然な看取りを選択することとはどういうことか。余計な点滴などしない方が苦しみが少ないことや、空腹で苦しむな

んてことはないということ、これまでに見送った方のご様子などの説明を丁寧にしてくださり、あなたのご著書と重なることが多くとても自然に受け入れることができました。

あなたのご著書を読んでいなかったらきっとドクターのご説明もよく理解できなかったのではないかと思います。そういう意味で本当に感謝しています。このご著書が多くの方に読んでいただけますように。お祈りしています。